



Title	<書評>”Richard Swedberg, ”Interest”, Open University Press, 2005
Author(s)	鵜飼, 洋一郎
Citation	年報人間科学. 2008, 29-2, p. 115-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5143
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◇書 評◇

Richard Swedberg
Interest

Open University Press, 2005

鵜飼洋一郎

「社会科学の一部をなす語句でありながら、当然なされるべき議論がいまだなされていない概念は多く存在している。インタレストという概念は、そのような概念のひとつである。本書において私が目指すのはインタレストの概念が活用され、そしてそれを定義するためになされてきた様々な試みについて輪郭を描くことである」
(p. vii) (1)。

著者であるスウェードボリが本書において試みるのは、社会科学においてしばしば使われてきた概念である「インタレスト」の系譜を経済学、社会学、政治学という社会科学の三本柱の上に描き出すことである⁽²⁾。インタレストは社会科学のいくつかの研究分野に共通して用いられる稀有な概念であるにもかかわらず、その概念が社会科学の概念としてどのような歴史をもっているのかに関してはほとんど検討がされてこなかった。著者が目指すのは、インタレスト概念の先行研究を社会科学という括りで整理することによって、その研究概念としての価値を改めて検討することである。以下では、著者の導きに従って「インタレストの系譜」を経済学、社会学、政治学の順に提示していきたい。

1、経済学におけるインタレスト

インタレスト概念は、「16世紀の中期から後期にかけて、近代社会科学（特に経済学）の台頭の一部としていくつかの根本的变化を

経験することになった」(p.26)。その根本的变化は、主に経済学によるインタレスト概念の経済的インタレスト (economic interest) への縮約に特徴付けられる。「経済学はインタレストを経済的利己心に変えてしまった。そして、経済的インタレスト以外のインタレスト(例えば政治的インタレスト、観念的インタレストなど)は分析の枠外に置かれる事になった」(p.28)。

著者は、19世紀経済学におけるインタレスト概念の用法の特徴を以下の4点にまとめる。第一に、インタレストのなかでも、経済的インタレストにのみ注目すること。第二に、分析の対象を経済の領域に限定すること。第三に、行為者は自身のインタレストについての完全情報をもっている(すなわち、自身のインタレストに完全に自覚的である)と想定すること。そして第四に、哲学的な関心から個人の内面に注目するような傾向を放棄したこと。こうした特徴を獲得していくと同時に、インタレストは市場における行為者の行動を分析するための重要な概念として、経済学の基盤へと組み込まれていった。

その後インタレストの概念は徐々に姿を消していくが、その理由のひとつは「インタレストをより無難で妥当な概念にしようという試み」(p.47)によって効用 (utility) 等の概念へと置き換えられていったというところにある。また、もうひとつの理由は経済学における関心のあり方の変化である。「20世紀の経済学者が論じるところによると、経済学を科学たらしめるものは、それが扱う「題材」ではなく「アプローチ」であった」(p.47)。経済学のインタレスト

という題材を取り扱うことへの関心は、合理的な行為者を想定することによって、いかにリアリティに迫ることができるかというアプローチへの関心へと推移していったのである。

その後、経済学の20世紀における科学としての成功の中で、インタレストの概念(ならびにインタレストにまつわる概念)はかなり特殊な形へと固定させられていき、経済的インタレスト以外のインタレスト概念が脚光を浴びることはほとんどなくなっていた。こうした経済学の全体的な流れの一方で、近年の経済学が「数々の新しく、かつ重要なインタレスト概念の用法を開拓する先鋒となってきた」(p.79)こともまた事実である。著者は、サミュエルソンの顕示選好理論、ゲーム理論における囚人のジレンマゲーム、エージェンシーセオリーという三つの議論を引き合いに出し、それぞれの研究において「経済的インタレスト以外のインタレストが、経済的インタレストの議論に添う形で分析されているという点で」、インタレスト概念が「拡張されつつある (expanded)」という点を強調する (p.105)。

2、社会学におけるインタレスト

経済学とは対照的に、社会学においてインタレスト概念とその歴史が脚光を浴びることは、これまでほとんどなかった。「マルクス主義社会学者がマルクスの階級的利害 (class interest) をときおり参照することを除いては、インタレストの概念が現代の社会学者に

よって用いられる際に、インタレスト概念の先行研究への参照は全くなされないのが普通である」(p.48)というのが実情である。

それゆえ、社会学におけるインタレストの概念をまとめた形で提示しようとすることは「もみがらの中から小麦の粒を拾い上げる作業」(p.vii)にも等しい困難なものとなる。こうした状況に立ち向かうために、著者はまず19世紀の社会学成立前後における社会的研究——マルクスとトクヴィル——の探索からとりかかる。著者によれば、階級間の対立するインタレストに注目したマルクスの議論と、インタレストが社会的に構築されるものである点に注目したトクヴィルの議論は、インタレストを自明の前提とし、常に調和に向かうものとして描こうとした経済学における議論とは大きく異なるものであった。

こうした先駆者たちの研究は、残念ながらその後の社会学のインタレスト概念に十全に継承されてきたとはいえない。だがそれを踏まえた上で、スウェードボリは次のように述べる。「多くの社会学者が著作の中でインタレスト概念について論じており、その用法の歴史は複雑であり、かつそれ自体として魅力的である。今日ではその歴史はほとんど知られていないわけだが、より広いインタレスト概念の歴史に組み込むことができるという点においても、それは語るに値するものである」(p.48)。著者は社会学者による議論を整理するために、インタレストを、①「社会生活の原動力 (driving force) とみなすアプローチ」、②「社会生活の主要な力 (major force) と見なすアプローチ」、そして③「ほとんど概念としての重要性を認

めないアプローチ」という類型化を行う。ここでは、著者が本書全体においてしばしば言及するウェーバーの議論をとりあげよう。

ウェーバーの議論は、第二のアプローチに分類される。このアプローチでは、行為者突き動かす力としてインタレストが主要なものと見なされる一方で、同時に何かしらの別の力学が説明に導入される。そうすることによって、「全てをインタレストで説明する(それゆえ、逆に何も説明できていない)」という過ちが回避されるのである。この点に関して、ウェーバーの議論では、「観念 (idea)」(p.66)が重要なものとなる。著者は、観念は「転轍手」であるとのウェーバーの比喩をもとに、次のようにまとめる。「人間の行為はインタレストによって、全速力の列車のように前へ前へと突き動かされる。だが、その方向は転轍手が決めるのである」(p.66)。ウェーバーは観念の作用を考慮に入れることで、説明原理としての有効性を減じることなくインタレストを議論に導入することに成功している。著者によれば、ウェーバーのインタレスト概念は、「社会学に特有の概念を構成するのにインタレストが利用可能である」(p.70)ことを示唆するものでもあった。

3、政治学におけるインタレスト

政治学におけるインタレスト概念の研究動向を、著者は20世紀なかばに端を発する利益集団 (interest group) の概念についての議論と、近年におけるインタレスト概念の操作化についての議論の2

点に整理する。利益集団の概念は20世紀初頭において社会学者であるベントレーによって提示されたものであるが、この概念は約半世紀後にトルーマンによって政治学の分野において再生され、その後オルソンによって批判的に発展させられた。そして、現在では政治学における「スタンダードな概念 (standard concept)」（p.78）となっている。

一方で近年の政治学では、インタレスト概念をいかに操作化すべきかについての議論が行われてきている。例えばコノリーは、「現代の政治学ならびに政治哲学におけるインタレストの諸用法」（p.90）は、実際はいくつかの系統に分けられると指摘する。政治学においてもっとも一般的なのはインタレストを「政策についての選好」（p.90）と同一視する用法であり、これは「政策選好としてのインタレスト (Interests as Policy Preferences)」と呼べる。また、利得の最大化を志向する行為者を想定する「功利主義者のなインタレスト (Utilitarian Interests)」も同様に一般的なものとなっている。だが、このインタレスト概念は、利己的ではない行動を説明できない。そこで、友情や博愛を志向するインタレストには「欲求の充足としてのインタレスト (Interests as Need Fulfilment)」概念を適用するのがよいだろう。このように「欲求」を単位とするインタレスト概念は好ましいもののように見えるが、この議論の問題点は行為者が数あるオルタナティブのなかから追及すべき欲求を合理的に選択できる能力を無視していることである。コノリーはこうした内省する能力 (reflective capacity) をインタレストにとって重要なもの

とみなし、もし個人が取りうるすべての選択肢とその結果を知った上で選択をすることができるとしたら、という前提を想定する「真のインタレスト (Real Interests)」概念を提示する。また、シュミッターは現行のインタレストについての議論が「理論的にはほとんど空疎になりかねないレベルで操作化されるか、意義のあるやり方で理論化されていながらも計量的な研究に活用しにくいものになってしまっている」（p.92）と指摘する。ここで、インタレストを「欲求や不足 (needs or wants)」（p.92）という他の現象によって定義することは解決策にはならない。なぜなら、シュミッターによればインタレストは「漏斗状に狭まっていくより大きなプロセスの一部として」（p.93）の性質を持つからである。インタレストの分析者はまず欲求 (needs) から分析を始め、次にインタレスト、さらに関心 (concern) 、行為 (action) 、関係 (association) へと分析を進めていかなければならない。ただし、これはあくまで分析上の序列である。「この漏斗において欲求はインタレストに先行するが、歴史的にはインタレストが欲求を形成することが典型的である」（p.92）。このように、「経済学がインタレストの概念をほとんど自明のものとみなし、社会学がインタレストの概念をこくたまたしか議論してこなかった一方で、政治学はその独自の用法について、インタレスト概念の操作化は可能か、それはどのようにすれば可能となるのか、そして、いかにそれを改良していけるのかといった点に関してより集約的な議論を展開してきた」（p.90）のである。

著者は以上の議論を踏まえた上で、改めてインタレスト概念を社会科学の概念としての確に操作化し、活用していくための指針を検討する。ここで、まず思いつくのは、「インタレスト」という概念を別の語句によって定義しなおすことで精緻化していく「伝統的なやり方」(p.94)である。だが、インタレストのような「何世紀にもわたって多様なコンテキストの一部であり続けた」(p.95)概念には、このやり方は不向きである。

ここで、筆者が提示するのが、「案内標識に従う行為者のアナロジー (the analogy of actors following a sign post)」において間接的にインタレストの特徴をとらえる戦略である (p.96)。このアナロジーは「何らかの形で「インタレスト」という語句のエッセンスをとらえる為に導入されるのではない。これは、インタレストの意味が、ある特定のタイプの行為の中に見出されるということを示すために導入されるのである」(p.96)⁽³⁾。

このアナロジーを構成するのは「行為者」「案内標識」「案内標識の示す方向に従った行為」の三つの要素である。例えば、我々が日常見かけるような案内標識を考えてみよう。それぞれの案内標識が示す方向はさまざまであり、それに従って進む方向は案内標識の数と同じだけ存在する。また、我々は案内標識のみに従ってのみ行動するわけではない。このような案内標識に従う行為者ならびにその行為の特徴は、インタレストにも適用することができる。すなわち、「案内標識の数と同じだけのインタレスト (宗教的、経済的、政治的、性的など) が存在している」(p.97)。そして、「行為者は、慣

習、伝統、そして感情といった他の力によっても行為へと突き動かされるが、そうした状況においてはインタレストが行動に与える影響力は小さく、それが進路を示すこともない」(p.96)。このように「案内標識」との関係においてインタレストを位置づけることで、「インタレストとは何か」という概念操作上の隘路に迷い込むことを回避できるのである。著者によっては明示されないが、このインタレストを導く案内標識のアナロジーは、理念がインタレストを方向付けるというウェーバーの議論を想起させる。著者は、「このアナロジーがインタレスト概念の本質へとわれわれの目を向けさせるものであることを強調したい」(p.106)と述べて、自身の議論をしめくくる。

本書の問題点は以下の二点である。第一に、著者自身によるインタレスト概念およびにその操作化についての議論が、本書で提示された数々のインタレスト研究の中にどのよう位置づけられるのが明示されていない。第二に、先行する議論と照らし合わせた場合に、改めてインタレスト概念を採用することでアカデミックに何を改善できるのかという点が十分には提示されていない。特に後者については、インタレスト概念の重要性が——それは著者にとっては自明なものかもしれないが——社会学において広く受け入れられていくためには、この点を明示することが重要となるだろう。

注

(1) 本稿では、interest の概念としての多様性を示すという著者の意図を

汲んで、敢えて日本語の訳をあてずに「インタレスト」という表記を採用する。

(2) 本稿では *political science* の訳語として、一貫して政治学という語をあてている。

(3) 傍点部は著者による強調。原文ではイタリック体。